

契丹語の孝について

吉池孝一

一

この小文は、契丹小字で表記された契丹語のうち、漢語で“孝”と解釈する語の語義と語構成についての覚書きである。さて、羅福成は「道宗皇帝及宣懿皇后國書哀册考羅福成」(『遼陵石刻集録』)において、“**𐰺𐰽𐰺𐰾𐰏𐰤**” “**𐰺𐰽𐰺𐰾**” “**𐰺𐰽𐰺𐰾𐰏𐰤𐰶**(原文は**𐰺𐰽𐰺𐰾𐰏𐰤**と誤写)” という3つの語形に仁聖大孝文皇帝の“孝”をあて、さらに遼史国語解により音訳漢字の“赤色得本”を付した<sup>1</sup>。長田夏樹 1951はその音訳漢字を遼史卷31 營衛志により“赤寔得本”とし<sup>2</sup>、漢字音 *chi' -shi' -də' -bən* を付し、その語源については“*mo. čisun*《血》の denominal *čisuda-*, *čisudu-*と関係あるか”とした。ここで“denominal”とするから、*čisuda-*もしくは *čisudu-*は、蒙古文語(*mo.*)の名詞 *čisun*《血》に動詞形成接辞として *-da-*もしくは *-du-*を付して動詞化したものということになる。長田氏は、この蒙古文語の *čisuda-*もしくは *čisudu-*と、契丹語の“**𐰺𐰽𐰺𐰾𐰏𐰤**”と関係があるとしたわけである<sup>3</sup>。

二

長田 1951 から2年の後、1953年に契丹語の研究を含む『慶陵』(田村實造・小林行雄著。上巻は1953年3月刊)が刊行された。この書には「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」(小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製。「接尾語表」と略称する)が付されている。この「接尾語表」は契丹小字で綴られた4つの哀册碑文を扱ったものである。契丹小字文は原字(最小の音単位)と呼ばれる文字成分を1字より最大7字まで組み合わせて1単位として綴り、それぞれの単位は空白によって区切られる。日本語の動詞活用表は横に語幹を並べ縦に活用語尾を並べたものであるが、本表はちょうどそのようにして、契丹小字文の1字以上の単位の前半部分を語幹とし後半部分を各種接尾語と想定して一覧表を作り、文法の体系を表示しようとしたものである。語幹は162あるがその第70番目に“孝”と関係のある語の語幹と、その語幹に4種の接尾語を付した語形が並んでいる。いま原表で縦

<sup>1</sup> 遼史国語解は実際には“得失得本”とする。

<sup>2</sup> “孝文皇太弟敦睦宮，謂之赤寔得本幹魯朶，孝曰赤寔得本”。

<sup>3</sup> *Lessing 1960 (1995)*によると“*čisu(n) Blood*” “*čisuda-* To be bloody or bloodstained”。『元朝秘史』をみると“赤速 *čisu* (血) 血”があり、それに *da* を付して動詞とした“赤速 *čisu* · *da-* (被血汚) 血まみれになる”がある。『元朝秘史』は小澤重男 1993による。

に配されているものを横書きで示すと次のようになる<sup>4</sup>。なおそれぞれの接尾語は $\boxed{\text{朮}}$ のように括る。語幹と接尾語間の附加成分は $\underline{\text{空}}$ のように下線を付す。

70  $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$  (語幹) —  $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\boxed{\text{朮}}$  —  $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\underline{\text{空}}\boxed{\text{朮}}$  —  $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\underline{\text{空}}\boxed{\text{付}\text{又}}$  —  $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\underline{\text{空}}\boxed{\text{付}\text{伏}}$

この第70番を長田1951の考えに沿って解釈するならば、 $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\boxed{\text{朮}}$ は血に相当する語幹 $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$ に属格語尾 $\text{朮}$ を付したものの<sup>5</sup>。 $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\underline{\text{空}}\boxed{\text{朮}}$ と $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\underline{\text{空}}\boxed{\text{付}\text{又}}$ と $\text{朮}\text{矢}\text{禾}\underline{\text{空}}\boxed{\text{付}\text{伏}}$ は、血に相当する語幹 $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$ に動詞形成接辞 $\underline{\text{空}}$ を加え、さらに3種の動詞接尾語 $-\text{朮}\cdot-\text{付}\text{又}\cdot-\text{付}\text{伏}$ を付したものと理解することができる。なお、 $\underline{\text{空}}$ の音価であるが清格爾泰2010は“t, t’”とする<sup>6</sup>。「接尾語表」は50年代初期の段階でdaという音価を与えたわけであるが、その根拠は、音訳漢字“赤寔得本 chi’ -shi’ -da’ -bən”の“得 də’ ”と「接尾語表」の附加成分 $\underline{\text{空}}$ との対応によるものであろう。

### 三

$\text{朮}\text{矢}\text{禾}$ を名詞の血とする説は即實1996にもみえる。同書は血とすべき文例を複数挙げるがその内1例を紹介すると次のとおりである(36頁参照)。

$\text{血}$  —  $\text{付}\text{力}$  —  $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$  —  $\text{火}\text{火}\text{化}\text{空}\text{又}$  (仁懿哀册第28行)

皇 子 血を 奉る<sup>7</sup>

即實氏はこれを“子皇致祭「子皇(即ち道宗皇帝)、祭を致す」”と漢訳し、『遼史・礼志』の記述を引き、遼には血を捧げて祖先や神を祭る習俗があったとする<sup>8</sup>。愛新覺羅烏拉熙春2004は、 $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$ を血とする即實1996を引き、その派生義として“親戚”“近親”と読むべき $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$ を含む文例を挙げる<sup>9</sup>。

### 四

$\text{朮}\text{矢}\text{禾}\underline{\text{空}}\boxed{\text{付}\text{伏}}$ などにつき、 $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$ を名詞とし、 $\underline{\text{空}}$ を動詞形成接辞とし、 $-\text{朮}\cdot-\text{付}\text{又}\cdot-\text{付}\text{伏}$ を動詞接尾語とする考えも即實1996にみえる(同書338頁)。

契丹語では名詞に対して直接に付加成分(附綴) $\boxed{\text{付}\text{伏}}$ を付すことはできない。もしも $\boxed{\text{付}\text{伏}}$ を付すのであるならば文法上の求めに応じて相応の語構成成分(構詞成分)を加え、し

<sup>4</sup> 吉池孝一2013参照。

<sup>5</sup> 「接尾語表」は接尾語の機能につき明らかにしないが、唯一 $\text{朮}$ については『慶陵』本文でその機能を名詞に付す属格語尾であるとする。

<sup>6</sup> 『清格爾泰文集 第五卷』所収の「《契丹小字釋讀問題》(修訂本)」による。

<sup>7</sup> 即實1996は、 $\text{血}$ を“汗”とし(4頁)、 $\text{付}\text{力}$ を“[pukəi, pəkəi]子”とし(4頁)、 $\text{火}\text{火}\text{化}\text{空}\text{又}$ を蒙古語の“[xurkəxun]送る”に当てる(20頁)。

<sup>8</sup> “古代祭神祭祖常見献血之俗。《遼史・礼志》記載：“冬至日，國俗，屠白羊、白馬、白雁，各取血和酒，天子望拜黑山。”祭山如此，則祭亡者之所謂献血或即類此。”(36頁)。

<sup>9</sup> “首一詞本義爲“血”，已爲即實先生解讀。 $\text{朮}\text{矢}\text{禾}$ \*fisu一詞的引申義有表示“親戚”的可能，這可以從女真語的\*səgi(血)/\*səgiŋgə(親戚)的語義關聯得到啓示。它指的可能是具有“血緣”關係的親屬，亦即“近親”。”(201頁)。

かる後に**𠬞**を付さなければならない。例えば**𠬞𠬞𠬞**には先ず**𠬞**を加えそれから**𠬞**を加える。また**𠬞**の場合、まず**𠬞**あるいは**𠬞**を加えそれから**𠬞**を加える。このことから分かるように**𠬞𠬞**はけっして名詞などではなく、当然のことながら“威力”など(と積せるもの)でもない。この**𠬞𠬞𠬞**も、文法に則り分析するならば、分析は可能なのである。**𠬞**は名詞。**𠬞**は語構成成分(構詞成分)であり名詞を動詞に変えることができる。**𠬞**は語構成成分(構詞成分)であるがその機能は明らかではない<sup>10</sup>。

上記より即實氏が**𠬞𠬞𠬞**を名詞とし**𠬞**と**𠬞**を動詞形成接辞とし<sup>11</sup>、**𠬞**を何らかの動詞接尾語と想定していたと見て取ることができる。同書は**𠬞**の文法機能として①名詞複数語尾、②名詞位格語尾、③動詞形成接辞を挙げる<sup>12</sup>。①と②については呉英喆 2007 にも同様の記述があるが、③についてその後の評価は管見にして不詳である。また**𠬞𠬞𠬞𠬞𠬞**などの**𠬞**が仮に③であるとして、どのような直訳となるかも不詳である。いずれにしても、**𠬞𠬞𠬞𠬞𠬞**の語義及び語構成をめぐる上述の説は長田夏樹 1951 に遡るわけであり、そのことを研究史に位置づけておきたい。

最後に余論として想像をまじえて言うならば、**𠬞𠬞𠬞𠬞𠬞**は**𠬞𠬞𠬞**血に**𠬞**を加えた動詞“血をもって(祖先を)祭る”に形動詞語尾を付した語で、それに漢語の“孝(祖先を祭る)”を当てたということであるかもしれない。

〈参考文献(発行年順)〉

羅福成 1934. 「道宗皇帝及宣懿皇后國書哀册考」『遼陵石刻集録』(金毓黻編録)奉天圖書館。  
長田夏樹 1951. 「契丹文字解讀の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」, 『神戸外大論叢』  
第2巻第4号, 40-66頁。

田村實造・小林行雄 1953. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上巻本文冊)京都大學文學部 座右寶刊行会。

Lessing, F. D. et al. 1960 (1995). *Mongolian - English Dictionary*. Original edition: 1960.

<sup>10</sup> 今止-**𠬞𠬞𠬞**(年号の皇統)の**𠬞𠬞𠬞**について論じた個所による。“從已經解讀的詞例得知, 契丹語名詞之下不能直接附綴**𠬞**。若欲附綴**𠬞**, 須按語法要求, 加綴相應的構詞成分, 然後方可附綴**𠬞**。比如**𠬞𠬞𠬞**, 須先綴**𠬞**, 爾後綴**𠬞**。又如**𠬞**, 須先綴**𠬞**或**𠬞**, 爾後綴**𠬞**。由此可知, **𠬞𠬞**必定不是名詞, 當然更不是什麼“威”。**𠬞𠬞𠬞**併非不可分解, 只是分解須合語法。**𠬞**是名詞。**𠬞**是構詞成分, 可使名詞變為動詞。**𠬞**是構詞成分, 語法功能不甚清楚。”

<sup>11</sup> 長田夏樹氏は1953年のメモに、**𠬞**に動詞形成接辞の機能のあることを書き記している。もっともこのメモは長田氏逝去(2010年)後に見つかったもの。吉池孝一 2012ab 参照。

<sup>12</sup> 名詞複数語尾(133頁など)。名詞位格語尾(233頁など)。

T h i r d r e p r i n t i n g : 1 9 9 5 . B l o o m i n g t o n .

- 小澤重男 1993. 『元朝秘史蒙古語文法講義 一附 元朝秘史蒙古語辞典一』 東京:風間書房。
- 即實 1996. 『謎林問徑 一契丹小字解讀新程』 瀋陽:遼寧民族出版社。
- 愛新覺羅烏拉熙春 2004. 『契丹語言文字研究』 京都:東亞歷史文化研究會。
- 吳英喆 2007. 『契丹語靜詞語法範疇研究』 呼和浩特:內蒙古大學出版社。
- 清格爾泰 2010. 『清格爾泰文集 第五卷』 赤峰:內蒙古科學技術出版社。
- 吉池孝一 2012a. 「關於長田夏樹先生遺留的契丹小字解讀工作的資料」, 『契丹學國際學術研討會會議論文集』 中國赤峰(赤峰市人民政府、內蒙古博物館、中國社會科學院民族學與人類學研究所、赤峰學院):327-335 頁, 2012 年 8 月。
- 吉池孝一 2012b. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど―「接尾語備忘録」の挙例と『慶陵』の記述―」, 『KOTONOHA』 (古代文字資料館) 第 118 号:1-4 頁, 2012 年 9 月。
- 吉池孝一 2013. 「契丹小字接尾語表(1953 年)―語幹と接尾語間の付加成分及び接尾語中の交替可能な原字について―」 『太田齋・古屋昭弘兩教授還曆記念中國語學論集』 東京:好文出版。